慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 鈴木智之著『顔の剥奪 : 文学から<他者のあやうさ>を読む』青弓社、2016年
Sub Title	
Author	松下, 優一(Matsushita, Yuichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2017
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.22 (2017. 7) ,p.148- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：鈴木智之著

『顔の剥奪――文学から〈他者のあやうさ〉を読む』青弓社、2016 年

松下　優一

印象的な装丁の本である。言うまでもなく装丁は、書き手と読み手を媒介し、様々な意匠に本の個性が演出される表層である（装丁の重要性あるいはメディアとしての書物について考えるには、表紙の像が浮かばない本の内容を思い出すことができるかどうか試してみればいい）。『顔の剥奪』と題された本書の「顔」は、こちらを見つめる若い女性の顔である。曇天の屋上だろうか、髪がなびいて顔にかかっているうえに、白抜きで題名と内容紹介の文字がかぶさっているせいで、その顔はよく見えない。それではタイトルにしたがって、その顔＝表紙ジャケットを剝ぎ取ってみよう。さて、あなたには何が見えるだろうか。本の背を中心に、ぼんやりと染みのように黒い影が浮かんで見える、のではないだろうか。髪の長い女性の上半身、おそらく表紙の女性､なるほどこれが素顔というわけかと､両者の顔を見比べて確かめようとする。しかし、外した表紙の向こうに浮かび上がった染みのような像は、目を凝らして見れば見るほど、見えなくなっていく（ような気がする）。むしろ、そこに目や鼻や口が見えているような気がするのは私の気のせいなのかもしれず､次第に人の顔でないような気さえしてくる。「顔は見えないものである。ただ、見えたような気がしているだけだ」（p.106）。そんな著者の言葉が響いてくるような、本書が主題とする顔の本質を実に見事に表現した装丁、というべきだろう。

本書は、小説作品に登場する「顔がない」人物の形象（「顔の不在」の表象）を読み解くことで、そこに孕まれている現実感覚（リアリティ）を探り当てようとする試みである。序章では、動物行動学者松沢哲郎のチンパンジー論、神経生理学者ジョナサン・コールによるコミュニケーション媒体としての顔を欠いた人々の研究、あるいは哲学者鷲田清一の顔をめぐる現象学的な議論などが領域横断的に参照されながら、人々の社会的相互作用（社交）を可能にする「共在の器官としての顔」という基本的視座が設定される。これに続くのは、既発表のジャンル論 1 本と作品論 4 本である。探偵小説というジャンルがしばしば謎解きの論理には収まらないかたちで産出する毀損された死者の顔（第 1 章）、村上春樹『国境の南、太陽の西』（1992 年）のラストで主人公が出会う元恋人（イズミ）の表情が脱落した顔（第 2 章）、多和田葉子「ペルソナ」（1992 年）で描かれる異邦で表情をなくした者たち（第 3 章）、林京子「道」（1976 年）に登場する顔がない原爆の死者たち（第 4 章）、ジョルジュ・シムノン『メグレと首無し死体』（1955 年）でメグレが出会う表情のない女（第 5 章）。これら 20 世紀に書かれた様々な文学テクストにおいて呈示される「不在の顔」が、近代社会（第 1 章）、高度資本主義社会（第 2 章）、「異邦」を生きる移民の経験（第 3 章）、被爆経験（第 4 章）、階級と社会移動（第 5 章）とい

松下優一「書評：鈴木智之著『顔の剥奪――文学から〈他者のあやうさ〉を読む』」
『三田社会学』第 22 号（2017 年 7 月）148-150 頁

った文脈との関係で検討されていく。

とくに明示されているというわけではないが、本書で採用されている読解の方法は、『村上春樹と物語の条件』（青弓社、2009 年）と基本的に同じと見てよいだろう。すなわち P・マシュレが J・ヴェルヌ論で示した徴候論的読解（テクストが孕む矛盾や欠如に着目し、そこにテクストに外在する何事かの痕跡を読み取るという読解方法）である。例えば、探偵小説というジャンルにおける「顔を失った死者」の形象は、近代社会における人間の条件に結びつく「二重の暴力のアレゴリー」として読み解かれることになる。

では、全体として小説テクストに現れる「顔の不在」は、どのような現実の徴候となっているのだろうか。それは「対面性の脆弱さ」（p.195）、すなわち、一方で直接的に顔を合わせることなく取り結ばれるような関係性＝「顔の見えない関係」を拡大し、他方でメディア上に過剰なまでに「顔の図像」を露出するような「技術的な規定力全体の配置」（p.196）の浮上である、と著者は言う。これは単に情報通信技術（メディア）が、20 世紀を通じて非対面的なコミュニケーションの領野を拡大し、次第にその比重を高めてきたというような話ではない。対面的コミュニケーションの場面においてさえ、「目前に人がいればおのずから顔が見え、そこからただちに『関係』が始まる」というような関係のあり方を、もはや自明の前提にすることができないのではないか、これまで社会学（とりわけ相互作用論）が前提としてきた「共在」の意味・あり方自体が変わってしまったのではないか（p.197）。著者が呈示するのは、そのような対面的リアリティの変容なのである。

さて、私たちは本書をどのように評価できるだろうか。「顔」の問題は、E・レヴィナスの他者論や鷲田清一の『顔の現象学』によってコミュニケーション論的に重要な考察対象として認識されながらも、その捉え難さによって社会学やメディア文化研究の領域においては対象化・主題化され損なってきたのではなかったか。本書の意義は、この魅力的ではあるが扱いにくい対象を、相互作用論の枠組みから社会学的に位置付け、そして「顔の欠如」が何をもたらすのかという問題設定を行い、果敢にアプローチを試みたことそれ自体にある、といえる。とすれば、同時にここで、いくつかの疑問も湧いてくる。ひとつは、顔という主題にアプローチするうえで、文学（あるいは文学批評）という回路はどの程度必然性を持つのか、ということである。本書の副題は「文学から〈他者のあやうさ〉を読む」であるが、「文学から」でなくとも同じことができるのかどうか。これに関しては、序章の説明で十分という向きもあろうが、もっと説明してほしいという感じもする。また、あるいは同じことなのかもしれないが、本書は「文学からの社会学」の試みの一つと位置づけてよいのかどうか。表紙カバーでは「他者との共在困難と他者と出会い直すことの可能性を描き出す文学批評」と位置づけられているのだが、辿りつくのは社会学に対する問題提起である（「おわりに」）。第三に、「あとがき」で触れられている、「顔と顔のやりとりから生じる濃密な関係」あるいは「共在の場」から「おびえたザリガニのようにあとずさって生きている」という感覚（p.204）は、現代に固有のものなのかどうか

（どの程度のスパンあるいは世代で生じている事柄なのか）。2016 年は、遠藤知巳『情念・感情・顔―「コミュニケーション」のメタヒストリー』（以文社）、西兼志『〈顔〉のメディア論―メディアの相貌』（法政大学出版局）と、顔を主題にした文化社会学系の書籍が相次いで出版された年であった。本書は、その一冊であり、おそらく一番読みやすい（分量的にも、価格的にも）。気鋭の文化社会学者が揃って「顔」論を出すというこの同時代性について、ぜひ著者のコメントを伺いたいところではある。

顔という主題が現代社会や現代文化を考えようとする者にとってどのようなアクチュアリティを持って立ち現れようとしているのか。本書は、様々な示唆を与えてくれるはずである。最後に、読みながら頭に浮かんだ身近な現象をひとつ。いつの頃からか「だてマスク」という言葉が登場し、Wikipedia に項目と説明が存在する程度に知られている。風邪や花粉症予防という目的で着用するのではなく、自らの顔を人前に晒さないためのマスクのことである（マスクをしたある女子学生は、化粧する時間がなかった、と言っていた）。気がつけば、とくに冬から春にかけての季節、電車で周りを見回せばマスク着用者が多数派を占め、街中マスクだらけである。そのような人々の群れに混じって、表向きの理由とは別に、マスクをしたほうが人前で楽に振舞えるという感覚が私たちのあいだに広がっているのかもしれない。

（まつした　ゆういち　法政大学兼任講師）